

新潟県知事賞

私の弟から学んだこと

長岡市立下塩小学校

四年 なか むら まい の
中 村 莓 乃

私の弟には、自分の体を支えるきん肉のはりが弱い、「低きんちょう」があります。

学校では、弟が入学するときに新しく階段に手すりをつけてくれました。その手すりは弟のためのとくべつな手すり、他の人が使う場所とは反対がわについているものです。また、弟とほかの人がぶつからないように、階段に線もつけてもらいました。

私は、弟のために校しゃの中をいろいろと工夫して生活しやすくしてくれたことがとてもうれしかったです。

今年、二年ぶりにたて割りはんの人と歩く全校遠足がありました。弟は、一年生の時に経験していないので、最後まで歩けるかどうか、母も私もとても心配しました。私は、一番後ろのはんだったので弟の様子を不安になりながら見ていました。心配していたとおり弟は、自分のはんからだんだんとおくれ、担任の先生や教頭先生といっしょに手をつないで歩いているのが見えました。私は、弟の姿を見て、おくれてもいいから最後まで歩きとおしてほしいと、強く思いました。

私は、弟を追いこし先にゴールしました。みんなが休んでいるさいちゅうも弟は歩きつづけていました。弟のすがたが見えた時、弟のはんの人たち全員が、弟をむかえてくれ、

「もうちょっとだよ。がんばれ！」

と、おうえんしてくれました。弟は、うれしそうに走りだしました。最後は弟をかこんでもう一度みんなでゴールしました。弟はそのことがうれしくて、学校に帰ってきてからも、担任の先生に何度も話したそうです。そして、ふり返りの作文にも、書いていました。

世界には、弟のように体に不自由をかかえている人がたくさんいます。そういう人たちのためにいろいろな工夫がたくさんあります。目の不自由な人たちのための、点字ブロックや車いすにのったまま移動できる電動の階段や、スロープなどです。

世の中にあるこれらのものは、弟のためにつくられた階段の手すりや、弟といっしょに歩いてくれた、たてわりはんの人たちと同じだと思います。なぜなら、体の不自由な人へのやさしさから生まれたものだからです。

私は、世界中が、差別のないやさしい世界になればいいと思います。そして、体に不自由がある人もない人も、助けあっていける世界にしていきたいです。

新潟県教育委員会教育長賞

ひとの言葉の力

新潟県立柏崎翔洋中等教育学校

二年 しば の ひと き
柴 野 仁 希

今、世界中で新型コロナウイルスが猛威を振るっています。マスメディアでは災害レベルと報道され、連日感染に関するさまざまな情報が錯綜しています。そのような状況の中、私はある記事を見つけました。

「噂するの、村八分にするの、後ろ指さすの、陰口を叩くのも、ウイルスじゃない。この『ひと』なんだよなあ。」

これは見附市のフェイスブックに掲載された漫画の一部です。これを見たとき、私は本当に怖いのはウイルスに感染することではなく、ひとの言葉だと思いました。

私の住む柏崎市では、今日までに多くの方々が新型コロナウイルスに感染されました。柏崎市では根拠のない情報を拡散させることや、差別的な言動をやめるよう呼びかけたり、市長自ら防災行政無線を使って「今こそ地域のつながりを大切に、お互いを思いやる心を持ち、この難局を乗り越えましょう。」と訴えています。しかし、SNSでは誰が感染したのかというまるで犯人を探すようなコメントや、本当かどうか分からない不確かな情報があたかも真実のように扱われ、誹謗中傷が当たり前のように繰り返されています。このこと知って、私はとても悲しくなるのと同時に悔しくなりました。なぜなら誰もがわざと感染したわけではないからです。中には感染を広めないために勇気を出してPCR検査を受けに行った人もいるかもしれません。「誰が感染源？」ではなく、「大丈夫？」と言葉をかけ合う社会であってほしいと思います。

こんな風に考えるのには理由があります。私は小学四年生の時に苦い経験をしたからです。当時インフルエンザが流行し、私の隣のクラスは学級閉鎖に追い込まれました。幸い私のクラスは一人も感染者がいなかったのですが、そんな中私は「このクラスからは一人もインフルエンザを出したくない。」と発言してしまったのです。感染するかもしれないと不安なクラスメイトの気持ちを全く考えない自分勝手な発言でした。その罰が当たったのか、クラスで一番目に私が感染してしまいました。自分の発言を後悔したのは言うまでもありません。この時母に叱られ、言われたことは今でも忘れず心にあります。それは「一度口から出た言葉は二度と取り消せない。だからよく考えてから発言しなさい。」というものです。言った方は忘れてしまっても、言われた方は心に深く残る言葉があるはずです。もちろん嬉しい言葉もありますが、相手を傷つけてしまう言葉もあります。動物の中で言葉を話せるのは人間だけです。だからこそ、私たちは言葉の使い方を間違えてはいけないと思います。

ひとの言葉には力があります。まず未来を担う私たちが相手を思いやる気持ちで言葉を使えば、日本中にその輪が広がり、新型コロナウイルスに感染しても差別や偏見のない安心して暮らせる社会をつくることができるのではないのでしょうか。私はそのような社会になってほしいと心から強く思います。そして新型コロナウイルスが一日でも早く終息することを切に願うばかりです。

新潟日報社長賞

私にできること

妙高市立新井中学校

二年 ふな ざわ か な
檜 澤 花 奈

たくさんの人に支えられて在る父の今。次に支えるのは私の番――。

四年前の二〇一七年一月七日。私たち家族はスキーに行っていました。快晴のスキー日和。みんなで笑いながら楽しく滑っていました。昼食をとり、午後も楽しく滑るはずだったのが、笑うことのできない事故に父が遭ってしまいました。スノーボードとぶつかった父は、すぐに病院に運ばれ、頸椎損傷と診断されました。これは、この先の父の人生は杖と一緒に過ごすということを意味しました。

私は、杖を使って生活している人が身近にはいなかったもので、杖というものをよく知りませんでした。触ったこともありませんでした。父が家の中で杖を使い始めたときは、父自身も、私たち家族も、杖に慣れず、おもしろおかしい空間ができました。何だかぎこちなく、不自然な動きになってしまうのです。でも私たち家族は全力で、杖を使う父のことをサポートしました。椅子から立ち上がろうとするとき、布団から起き上がろうとするときなど、サポートできることは、できる限りやりました。私が父のことをサポートして、父が何か一つのことでもできたとき、私は心の中にじんわりと温かさが広がっていくのを感じました。

私たちは、旅行が大好きな家族です。父の事故前は、遠くに出かけることが当たり前でした。父の事故後は、出かけたくても、いつも父の身体が心配で、遠くには出かけられません。ですが、出かけたときには、

「大丈夫ですか。」

と声をかけてくださったり、ベンチの席を譲ってくださったりなど、必ず父のことを気遣ってくださる方がいて、本当に心が温まりました。このように、今の父が在るのは、たくさんの方々に支えてもらっているからです。

父の事故で、それまで自分が知らなかった経験できなかった悲しさと同時に、優しさもたくさん知ることができました。たった一瞬の出来事で変わってしまった父の人生。事故は不幸なことではあるけれど、たくさんの幸せも感じることができました。私は、父を支えてくださるたくさんの人と関わるすることができました。親戚の人たちとも、たくさん関わるすることができました。思わぬ出来事で、愛する人が重い傷を負ってしまった方々の気持ちを考えること、わかることができるようになりました。

父はいつも笑っています。弱音を吐きません。怒りません。自分自身の身体について何も言いません。そんな父の周りには、人が集まっています。それはなぜかと考えたとき、父は人を思いやる優しさをもっているからだと思いま

した。父は、誰かが困っていたら、自分より先にその人を助けます。誰にでも手を差し伸べられる人が、本当に優しい人だと思います。父もそうです。私はそんな父に憧れをもっています。いつも笑顔で、優しい父に。

皆さんに恵まれて父の今が在ることに、私は感謝の気持ちでいっぱいです。皆さんが父にしてくださったことを、これからお返ししていきたいです。それは、誰にでも手を差し伸べることです。身体が不自由な人にはもちろん、子どもから高齢の方まで、全世代の方に手を差し伸べていきたいです。そのために、日頃の生活から、人を思いやる優しさをもって行動します。そして、いつか世界中の人に手を差し伸べられる人に、私はなりたいです。

差別のない世界を目指して

新潟大学附属新潟中学校

二年 瀬 高 礼 乃

皆さんは差別されたと感じたことがあるだろうか。私は二度はっきりと感じたことがある。

一度目は、海外での出来事だ。

「ジャップ。」

数年前、カナダに住む親戚を訪ねた時、私は通りすがりの男性に大声で怒鳴られた。突然の事に、私は何が起こったのか理解できず、ただただ恐ろしかった。私はその時初めて、日本人に対する差別用語が存在することを知った。そして、私自身が有色人種であり、アジア人であり、差別の対象となり得ることを知ったのだ。怒鳴られる理由は何一つ思い浮かばなかった。たった一言が、一瞬のうちに「私」という人格を消し去り、とても惨めな気持ちにさせたのだ。しばらくの間、なんともいえない嫌な気持ちだけが、ぐるぐると体中を駆け巡った。

二度目に差別を感じたのは、昨年春のコロナウイルス蔓延に伴う休校期間中だ。

「子どもが出歩くのはけしからん」という雰囲気の中、アレルギーの薬をもらうために病院に行くことすらも後ろめたいような気分で、私は毎日人目を避けてこそこそと生活していた。

「学校が休みなのに子どもが外に出ていいと思っているのか。」

と面と向かって言われたこともあった。不安なのは誰でも同じ。大人が日常を取り戻そうとする中で、子どもばかりが悪者にされ、理不尽だと思った。

そうした経験から、自分は絶対に差別はしないと心に誓っている。しかし、意図せず差別的な発言をしてしまったことがある。

近所に黒人男性が住んでおり、いつも気さくに声を掛けてくれる。先日、いい色に日焼けした彼に

「真っ黒になったね。」

と言ってしまい、とても後悔した。日本で二十年以上暮らしている彼は、びっくりした様子もなく

「真っ黒だよなー。」

と笑っていたが、黒人の彼の本心は聞けずじまいだ。

差別というのは、他人の自尊心を傷つける酷く醜い行為である。差別された人間は、悲しいなどという言葉では片付けられない、なんともいえない感情で胸が押しつぶされそうになるのだ。誰一人として差別されても良い人などい

ない。若者も高齢者も、男も女もそれ以外の人も、外国人も障害を持つ人も、皆生きがいを持ち、自分らしく暮らす権利がある。

今年、オリンピックが開催された。私は選手の活躍に興奮し、勇気や感動をもらった。しかし、それ以上に強く印象に残ったのは、どの国の選手も、コーチやチームメイト、家族や支援者、開催国である日本に対して感謝の気持ちを述べていることだ。私は、オリンピックを通じて、人間は助け合いながら生きているのだと強く感じることができた。そして感謝の気持ちは世界共通語なのだと実感できた。

どういう言葉が差別用語だとか、どういう行為が差別に当たるとか知ることは大切だ。しかし、何がいけないというよりも、人と人とのつながりを大切にすゝる気持ちの方が大事だと思う。人の嫌がることを言わない、しない。想像力を使って相手の立場を考える。そして感謝の気持ちを表現する。こうしたシンプルな考えこそが、差別をなくすための一歩だと思う。

新潟県社会福祉協議会長賞

とっさに動いたぼくの足

長岡市立青葉台小学校

五年 みや した め ろ
宮 下 音 奏

ぼくには忘れられない思い出がある。ふみ切りを自転車で渡ろうとしたらバーが下りてきた。もう渡るのは無理だと待っていると、反対側からたくさんの荷物を乗せてふらつきながらおばあさんが、ふみ切り音が鳴っているのに歩きながら渡っていた。

「あぶない！大丈夫かなあ。」

お姉ちゃんと二人で心配そうに見ていると、おばあさんは、自転車ごとたおれてしまった。

「まずい！」

と思ったしゅん間お姉ちゃんとぼくの後ろにいた高校生と車に乗っていた女性はみんな何のためらいもなくたおれているおばあさんにかげより、おばあさんの救助、自転車運び、荷物を回収してふみ切りの外へ運び始めた。ぼくも怖かったけど、電車がまだまだ来ないのをかくにんして、散らばった荷物をかかえてふみ切りの外へ出した。幸い駅出発で発車するとすぐのふみ切りで、電車のスタートもおそいので、電車が走り出したら見えるというもあり、

「急げばなんとかなる！」

の高校生の一声で、声をかけ合っていないのに、みんながおばあさんにかげ寄って手助けを始めた。ぼくはおどろいた。本当は危険ではいけない行動だった。でも困っている人がいて見て見ぬふりをしている人が一人もいなかった。

助け合いというのは考えてすることではない。自然と体が動くんだとぼくは感じた。ぼくも考えていたら一步の足がむかなかったと思う。でもいっせいに迷わず助けに行った時は、むがむ中だったからできたことおばあさんを助け線路の外に出た時、足のふるえが止まらなかった。お姉ちゃんに、

「ぼくたちって良い事したの？」

と聞くと首をよこにかしげた。するとお兄さんが寄って来て、

「本当はしちゃいけないよ。でも君は人を助けた。ヒーローだ。」

と言って頭をなでてきた。おばあさんは、転んだ足がいたいのか、足をなでながら、みんなにお礼を言いながら頭を下げている。もうこんなことは二度としない。絶対にしない。でも今回だけ、お姉ちゃんに言った。

「ぼくたち、良いことをしたんだよね？」

お姉ちゃんは、

「うん。」

とうなずいた。

助けるために動いたぼくの足。とっさに動いたぼくの足に、ぼくは、えらいぞとなでてあげた。たずけることの重みを感じた。

思いやりと助け合い

胎内市立中条小学校

六年 わた なべ ゆ な
渡 邊 結 菜

私は、お店に行くと募金箱を見つけます。お母さんがレジでお金を払っている時に、募金箱にお金を入れたことがあります。

今、私はボランティア委員会の委員長をしています。私たちも「緑の募金活動」を行いました。朝、玄関で募金箱を持って立っているとたくさんの人が募金をしてくれました。「緑の募金」は、森林を守るために使われています。

「赤い羽根共同募金」は、新潟県内で、子どもたちやお年寄りの役に立っていることが分かりました。そして、募金活動の意味について考えました。私は、「思いやりの心と助け合いの心でお互いに支え合いましょう」ということではないかと思いました。

このように、募金活動について調べることをきっかけに、お店に置いてある募金箱を見つけると、「この募金は、何のために使うのか」を考えます。置いてある募金箱をよく見ると、災害の復旧のための募金や盲導犬のための募金など、いろいろな種類の募金があることに気づきました。

募金の目的はいろいろあるけれど、どの募金もみんながその目的を理解して少しずつ募金することで、その目的のために役に立つことができると思いました。

自分ができることを考えたり行動したりすることで、思いやりと助け合いが生まれます。また、地域でできることとして、落ちていた物を拾ってきれいにしたり、地域行事に参加したりすることで思いやりと助け合いの輪が広がります。学校では、相手の目を見てあいさつしたり、落とし物を拾ったり、困っている人に声を掛けたり助けたりすることで思いやりと助け合いができると思います。

これから、私たちボランティア委員会では、「赤い羽根共同募金」に取り組みます。全校の皆に呼び掛けて活動を行い、地域や社会に役立ててほしいと思います。私は、これからみんなのために何ができるのかを考えて生活していきたいと思います。そして、誰もが幸せに暮らせる生活ができるよう、協力したり助け合ったりしながら行動していきたいと思います。